

兵庫県立大学環境人間学部 エコ・ヒューマン地域連携センター 活動・研究報告集 2018



通巻 2 号

学生が動けば、地域も変わる！

大学生と教員が地域へ飛び出し、さまざまな課題解決に挑戦した
地域連携活動や地域研究の成果を報告します。



兵庫県姫路市の家島諸島を今後の日本の縮図と見立てて、直面する地域課題を調査研究により明らかにし、学生主体の実践的プロジェクトを行っています。

(太田ゼミ 家島プロジェクト)

家島諸島を事例にした関係人口論の構築のための準備的調査

一兵庫県立大学環境人間学部学生へのアンケート調査の報告—

都市計画研究室（濱田悠輔・大江万梨・神原秀政・米田達海・太田尚孝）

1. アンケート調査の背景・目的

近年、人口減少に悩む地域が全国各地で増加している。これは地域づくりの担い手不足に直結し、全国各地で持続的な地域活動が困難になりつつある。ここで言う担い手は専門的知識を有した者よりも将来的に様々な形で地域に関わる可能性のある若者（学生）のことを指す。この若者の地域に対する考え方や感情を知ることは人口減少で悩む地域への解決策の糸口が見つかるのではないかと考える。関係人口論から考えると地域に定住することは必ずしもゴールではない。なにかしらの関わりを持つことが必要であり、家島諸島のような人口減少下にあり、若者の流出が深刻な地域においては最初の段階として関わりを持たせることが最優先である。そのファーストステップとして姫路市に立地し、家島諸島の交流人口が多いと考えられる兵庫県立大学環境人間学部の学生を対象として、家島諸島の認知度や、条件不利地域に関する認識を把握するために行った。大部分は調査・研究の定量・定性的データの収集であるが、同時並行で行われる実践プロジェクトの内容を吟味する参考にもなると考えた。

アンケート調査は、2018年6月26日の「まちづくり論」受講者112名を対象とし、回収数は112（回収率：100%）、そのうち66%は2年生であり、男性が25%、女性が75%、回答者の出身地は58%が兵庫県内であった。なお、このアンケート調査は、「いえしまコンシェルジェ」として活躍の中西和也氏の活動報告の前後に実施した。



図1 家島諸島（写真手前が家島本島）の全景
(出所) 姫路市フォトバンク

2. 仮説の設定

アンケート調査を行うに際して、以下の4つの仮説を設定した。

I. 家島諸島の認知は姫路市出身の周辺地域に限られているのではないか

仮に関係がある場合、もっと広く認知させるべきであり、特に学生をターゲットとしているためSNSの活用が必要である。

II. 自分たちが作成した家島PJ新聞を閲覧した者の方はツアーへの出資額が大きいのではないか

確認されると、新聞の内容面のブラッシュアップや、より多くの人にもっと見てもらえるような場所に掲示することが必要である。

III. 回答者の出身地の地域により自然豊かな地域への関心が異なるのではないか

関係があり、さらに都市的な地域に住む人が自然豊かな地域への関心が薄いという結果になれば、関係人口論では都市的な地域に住む人に焦点を当てた解決策を考えることが必要である。

IV. 回答者の性別、学年でツアーの指向が異なるのではないか

異なるのであれば、ツアー参加者の属性に合わせたきめ細かいツアーの内容づくりが必要である。

3. アンケート調査の結果

①家島諸島の認知度・訪問歴・イメージについて

「まちづくり論の授業を習うまでに兵庫県姫路市にある家島諸島をご存知でしたか。」という質問には、54%の学生が「知っていた」と回答している。（図2）これは、学生の半数以上が兵庫県出身であることに起因していることが予測できる。

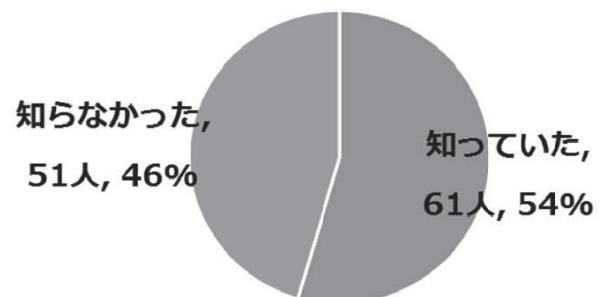


図2 家島諸島の認知度 (n=112)
(出所) 学内アンケート調査

その中で、13%の学生が「訪れたことがある」と回答している。（図3）

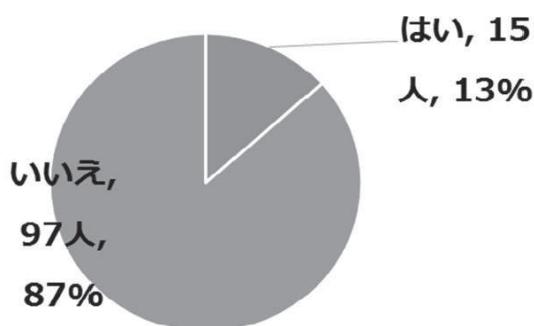


図3 家島諸島への訪問歴 (n=112)
(出所) 学内アンケート調査

さらに、「家島諸島に訪れた目的は何でしたか。」という質問には、観光が 27%、学校行事が 40%となっている。その他の意見としては、部活動や親戚の家に行くなどが挙げられた。(図4)

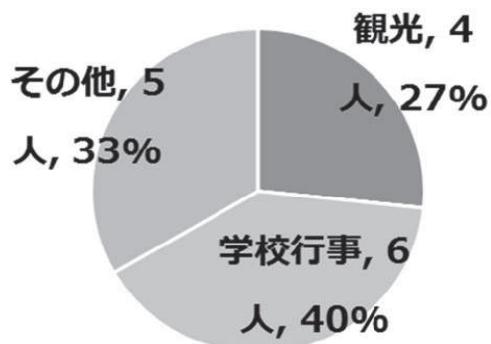


図4 家島諸島への訪問目的 (n=15)
(出所) 学内アンケート調査

家島諸島に対するイメージに関する自由記述形式での回答では、「観光的な島」「自然」「新鮮な海産物が食べられる」などが主な回答であった。

②関係人口になる可能性について

本調査では、島という特異な地域を研究対象地としているため自然豊かな地域への関心や関与についての質問から関係人口になりうる可能性があるのではないかと考えた。

まず、出身地の特性について尋ねたところ、自然豊かな地域と都市的な地域共に 50% であった。

(図5) 後の設問にある自然豊かな地域への関心・関与に影響していると考えている。しかし、個人の主觀であるため断定することはできない。

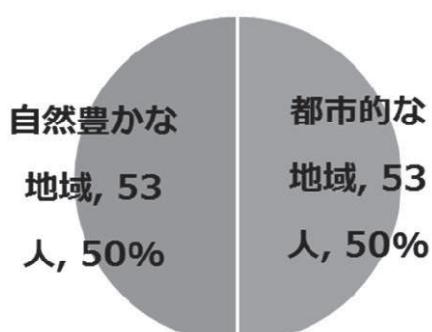


図5 出身地の特性 (n=106)
(出所) 学内アンケート調査

次に、「自然豊かな地域にどのようにかかわることに興味をお持ちですか。」質問には、「地域の特産品購入」が 39%、「ボランティア活動」が 37%、「頻繁な訪問」が 19% となった(図6)。しかし、「最近一年間で自然豊かな地域に訪れた目的」について問うと、「旅行・レジャー」が 55%、「授業」が 34%、「帰省」が 24% を占め、「農業体験や交流活動、地域貢献活動」は 14% であった。ここから、地域と関わることに興味はあるが、行動に移している人は少数派であることが理解できた。

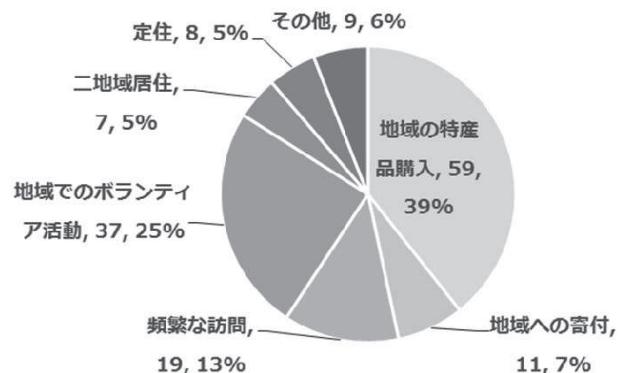


図6 自然豊かな地域への関与 (n=112)
(出所) 学内アンケート調査

また、「過疎化・高齢化により活力が低下した自然豊かな地域に対して、あなたはどのように関わりたいですか」という質問には、「積極的に参加したい」が 14%、「機会があれば協力したい」が 74% という結果であった(図7)。以上より、自然豊かな地域に向けて何らかの活動をするというニーズは調査対象の学生にあるのではないかと考えられる。

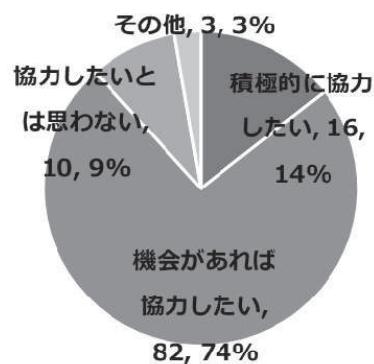


図7 自然豊かな地域の活動への参加意欲
(n=111)
(出所) 学内アンケート調査

③関係人口の理解度

学生は関係人口という新しい言葉やこの言葉が示唆する地域への多様な関わり方を知らないのではないかと考え、「交流人口、定住人口、関係人口」という言葉をご存知ですか」という質問をした。その結果、「全く知らない」と回答したのは「交流人口」が 72%、「関係人口」が 85%、「定住人口」が 24% であった。

④プロジェクトについて

まず、プロジェクトを周知するために発行している家島 PJ 新聞の閲覧を尋ねたところ、見たことがある人が 12%という結果であった。(図 8)

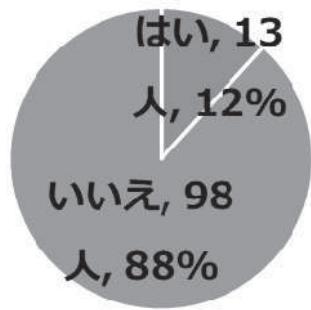


図 8 家島 PJ 新聞の認知 (n=111)

(出所) 学内アンケート調査

続いて、ツアーの指向やツアーに参加する際の希望予算を聞いた。ツアーの指向は「体験できるツアー」が 32%、「島のグルメ巡りツアー」が 30%、

「きれいな景色がみられるツアー」が 28%であった。(図 9) ここから、ツアーの企画案であった写真を使うツアーに決定することができた。

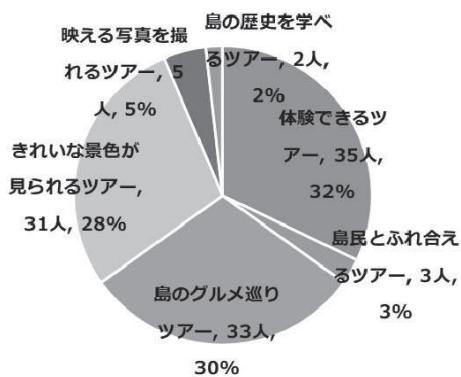


図 9 ツアーの指向 (n=109)

(出所) 学内アンケート調査

ツアーの希望予算については 1000 円～3000 円が 55%である一方で、5000 円以上出すことができると答えた人が 6%であった。(図 10)

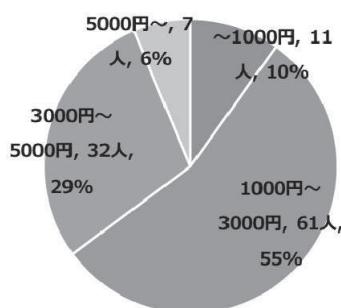


図 10 ツアーの希望予算 (n=111)

(出所) 学内アンケート調査

最後に、中西氏の講演を受けた感想を自由記述で回答を得た。すると、「時間がゆっくりと流れていそうで、行ってみたいと思いました。」といった家島諸島に興味を持った、訪れたいという肯定的

意見が多数あった。その他、「(中西氏の活動は)関わっている人も活動を楽しみながらも課題を解決していて、魅力的な活動だなと思いました。」などの中西氏の活動自体に魅力を感じた、面白いと思ったという意見が多数あった。以上より、実践家の活動報告が回答者側の家島諸島に対する興味関心を高めたと思われる。

⑤仮説の検証

I. 家島諸島の認知は姫路市出身の周辺地域に限られているのではないか

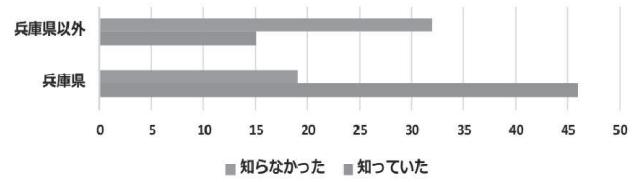


図 11 家島の認知度と出身地

($\chi^2=16.6$, df=1, P=0.000046)

(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいと思われる統計的な証拠が得られた。よって今後は、兵庫県以外への人が重要であり、例えば SNS の活用によるより積極的な周知活動が考えられる。

II. 自分たちが作成した家島 PJ 新聞を閲覧した者の方はツアーへの出資額が大きいのではないか。

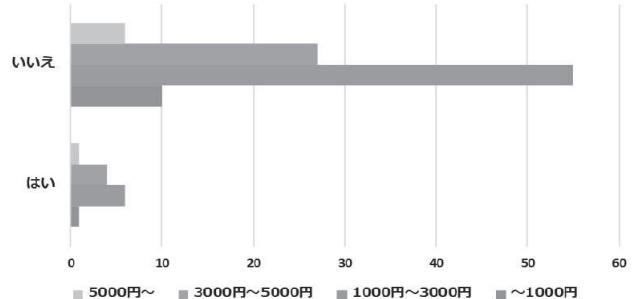


図 12 家島 PJ 新聞の認知とツアーへの意欲

(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかった。まずは新聞を見もらうことが重要である。例えば、食堂付近への掲示などは有効であると考えられる。

III. 回答者の出身地の地域により自然豊かな地域への関心が異なるのではないか

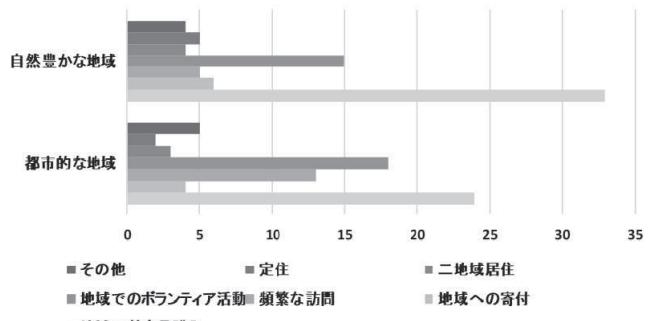


図 13 出身地の属性と自然豊かな地域への関与

(出所) 学内アンケート調査

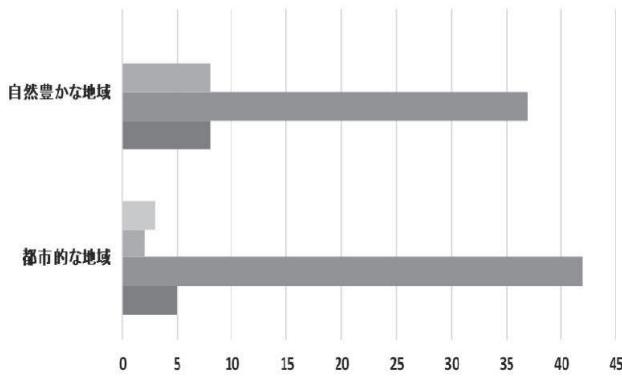


図 14 出身地の属性と自然豊かな地域への関心
(出所) 学内アンケート調査

仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかった。関心について「機会があれば協力したい」が多く、関与については「地域でのボランティア活動」が多くだったので家島側から学生に対してボランティア活動やイベントの参加を募れば興味を持つ学生が多いのではないか。

IV. 回答者の性別、学年でツアーの指向が異なるのではないか

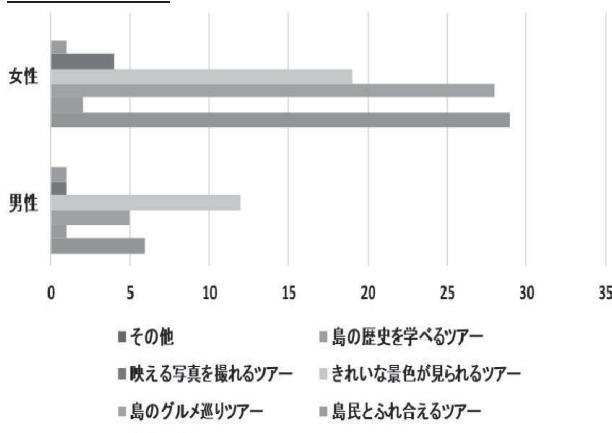


図 15 性別によるツアーの指向
(出所) 学内アンケート調査

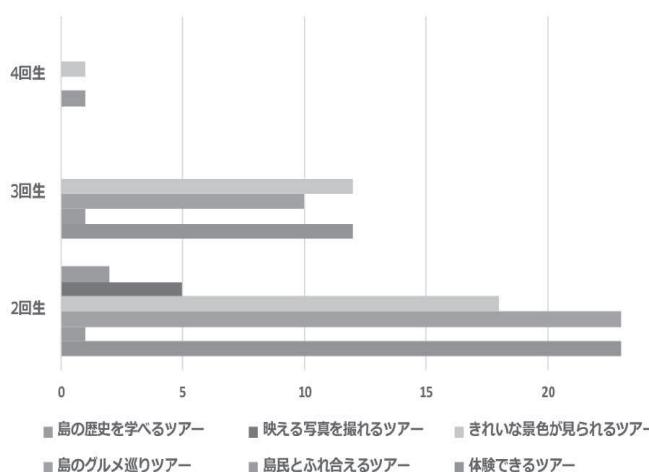


図 16 学年によるツアーの指向
($\chi^2=22.75$, df=12, P=0.011)
(出所) 学内アンケート調査

性別では仮説が正しいという統計的な証拠は得られなかったが、学年では仮説が正しいという統計的な証拠が得られた。しかし、標本数が少ないので信頼度は低い。やはり、体験、グルメ、景色が上位にあり、ツアーの内容は上記 3 点を含めたものが望ましい。

4. 考察・提案

回答をした兵庫県立大学環境人間学部の学生は自然豊かな地域への関心やそこでの活動参加意欲が高く、家島諸島で考えられる関係人口図(図 17)に当てはめると、彼らは「無関心・無関与」「交流人口」といえる。一方で、潜在的には自然豊かな地域への地域貢献活動意欲が高いため地域の担い手として重要な役割を果たしていることが分かった。現状では、彼らの役割をうまく機能させることができない状況である。図 7 で示すように機会さえあれば地域との関わりに参加したという学生が多いため、家島側からアプローチが必要である。具体的な内容としては家島秋祭りの参加を求めることがや、家島の学校で研究や学生の成果を発表する場を提供することで少なからず家島の発展に寄与するものと考える。

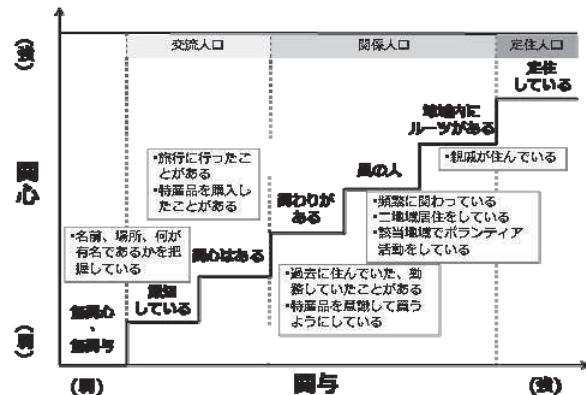


図 17 関係人口図
(出所) 小田切 (2018), pp. 15 を参考に作成

参考文献

小田切徳美 (2018) : 関係人口という未来ー背景・意義・政策, ガバナンス / ぎょうせい (202), pp. 14-17

姫路フォトバンク :

www.city.himeji.lg.jp/topic/photobank.html

謝辞

25 私たちのアンケート調査に参加していただいた学生の皆さんに対して記して感謝申し上げます。

(文責 : 濱田悠輔)

「シビックプライド」のアイデンティティ概念に関する地理学的再検討

—兵庫県南あわじ市福良地区を事例に—

平野賢治, 杉山武志

(兵庫県立大学環境人間学部)

1. はじめに

近年、地域活性化やまちづくりの実践のなかで、「シビックプライド」の考え方に対する注目が集まっている。特に、都市計画学者の伊藤香織などによる、広告会社と連携した研究成果が顕著になりつつある。「シビックプライド (civic pride)」とは、「都市に対する市民の誇り」のことを指す(伊藤・紫牟田監修 2008; 伊藤・紫牟田監修 2015)。具体的には、観光振興や「シティプロモーション」、定住計画などの施策の上位目標やキーワード¹⁾として、「シビックプライド」の言葉を垣間見ることができる(小島・片田江 2015,p.212)。とりわけ本稿が関心を覚えるのは、伊藤たちが述べる、大都市よりもむしろ中規模・小規模の都市や過疎化する田舎町で「シビックプライド」が求められている(紫牟田 2015,p.216)とする点にある。そして、「シビックプライド」を醸成するデザインの視点として重視されているのが、コミュニケーションにある。「シビックプライド」の範疇は広く、①広告、キャンペーン、②ウェブサイト、映像、印刷物、③ロゴ、ヴィジュアル・アイデンティティ、④ワークショップ、⑤都市情報センター、⑥フード、グッズ、⑦フェスティバル、イベント、⑧公共空間、⑨都市景観・建築という「コミュニケーション・ポイント」が挙がっている²⁾。アイデンティティは、その一翼を担う概念と捉えられる(伊藤・紫牟田監修 2008,pp.12-13)。

しかしながら「シビックプライド」という名称、すなわち、愛着や誇りといった部分に関連しうるアイデンティティ概念そのものへの考察があまり見受けられないことは、研究課題として認識されるものではなかろうか。上述の伊藤・紫牟田監修(2008; 2015)を確認する限り、「シビックプライド」でのアイデンティティとは主に、都市や農村などの場所的、地域的なものが該当する。こうしたアイデンティティが、「シビックプライド」と密接に結びつくとされている(伊藤 2015, pp.176-177)。それゆえ、「シビックプライド」の提起において鍵を握る地理的事象としてのアイデンティティ概念への議論がそれほど進められていないことに、素朴な疑問を覚える。

本稿においても、「シビックプライド」の論点が多岐にわたること、とりわけ「コミュニケーション・

・ポイント」(伊藤・紫牟田監修 2008,pp.12-13)をデザインするための議論に重点が置かれていることを理解してはいる。また、「シビックプライド」の考え方においても、「単なるプロモーション活動に終始すること」(伊藤 2008,p.169)や「誇大広告」(紫牟田 2008,p.179)については、否定的な見解が示されていることも認識している。他方で、「シビックプライド」の核となりうるアイデンティティという重大な問題が、「シビックプライド」論者たちの想いと乖離した安易な「プロモーション」に動員されかねないと懸念もあわせて示されていかなければならない³⁾。その警鐘の一端を鳴らすためにも本稿では、具体的な事例の検討を中心に、地理学の観点から「シビックプライド」のアイデンティティ概念を見つめ直し、同論を補完する論点の提起を目的とした。

本稿の構成は、以下の通りである。第2章では、「シビックプライド」の重要なキーワードの一つであるアイデンティティとその形成に関わるイメージの概念的論点を示す。第3章では、研究対象となる南あわじ市福良地区の概要およびウェブサイト、映像から理解された南あわじ市による福良地区の捉えられ方を示す。第4章では、南あわじ市福良地区住民への聞き取り調査と参与観察結果をまとめる。そのうえで第5章において考察を行い、第6章で本稿なりの結論を導き出したい。

2. 概念的論点

第2章では、「シビックプライド」をめぐる重要な概念の一つでもあるアイデンティティの論点を説明しておきたい。まず、基本の確認であるが、アイデンティティは、自己が同一・連続しているという感覚と、自己(の同一性)が社会的に承認されているという感覚の2つからなる。心理的状態を表現する概念として、心理学者のE.H.エリクソンによって提唱された(大堀 2010)。こうしたアイデンティティの基本的な見方のもと、「ローカル・アイデンティティ」や「地域アイデンティティ」(大堀 2010)といった地理的事象でのアイデンティティの問題も論じられている。この場合の個人のアイデンティティは、ある程度同じ領域内における集団のアイデンティティと複層的に重なりが存在し、集団にもアイデンティティがある

(大堀 2010) ものとして描かれている。

地理学においても、地域アイデンティティ概念は関心事の一つとなってきたが（杉山 2011）、どちらかといえば、地域よりも比較的狭域を対象とした場所スケールでのアイデンティティ（レルフ 1999,p143）に関する研究が先行してきた。本稿が論じるアイデンティティは、地域スケールでのアイデンティティも認識しながら、レルフが示してきたような場所スケールのものが中心となる。

さて、レルフ（1999）において大事となる論点は、場所的アイデンティティが、表層レベルから深層レベルに複層化していくことにある。レルフによるとアイデンティティは、その場所のイメージが個人的なものであるか集団的なものであるか、あるいは社会的に共有されたものかによって異なることがあるという。レルフは「特定の場所でも異なった集団にとっては、まったく異なるアイデンティティをもつかもしれない」という現実を認識したうえで、「共有意識となった場所のアイデンティティ」（レルフ 1999,p.148）を重視する。

一方でアイデンティティは、イメージの問題とも表裏一体の関係にある。多くの場合、イメージがまさにその場所のアイデンティティであり、イメージの社会的構造のようなもの（レルフ 1999,p.143）となってしまっていることも現実である。そのうえでレルフは、次のような警鐘を鳴らしている。すなわち、イメージの統合が弱くて表層的であるときには、それは場所に大衆的なアイデンティティが与えられている（レルフ 1999,p.146）という点である。大衆アイデンティティとは、集団や個人の経験から発展したというよりも、世論を誘導する者によって与えられる「できあいのアイデンティティ」を人々に与え、商業広告を代表とするマス・メディアを通じて広められる（レルフ 1999,p.146）。アイデンティティを形成しているものは、人々の経験や活動を通してイメージである。イメージによって形成された表層レベルのアイデンティティは、集団や個人の経験から発展したというよりも、世論を誘導する者によって与えられる。それにより、「できあいのアイデンティティ」を人々に与え、マス・メディアを通じて広められる（レルフ 1999,p.149）。

そのマス・メディアによって与えられたイメージと実態の乖離が生じることについて、多くの論者より危惧が示されてきている⁴⁾。マス・メディアが提供した間接的な接触の世界では“修正”されにくく、マス・メディアにのったことは「事実」になってしまい、というマス・コミュニケーションの「環境造成功力」によるところが大きい（石見・田中 1992）。そして、実態との乖離がしばしば起り、住民によるわがまちに対する誤解（石見・

田中 1992）というアイデンティティの埋没という事態も生じかねないこととなる。

特に、第1章でも確認した、コミュニケーション・ポイントとの関連が示されてもいる「シビックプライド」をめぐっては、地理的なイメージとアイデンティティ双方の葛藤がつきまとうこととなる。こうしたアイデンティティの埋没に危機感を覚えるがゆえに本稿は、「シビックプライド」をめぐる深層レベルでのアイデンティティ概念の地理学的再検討を促すのである。

3. 南あわじ市福良地区

3.1. 概要

概念的な論点整理を踏まえて、以下では具体的な事例の考察をはじめたい。まずは、研究対象に選定している兵庫県南あわじ市の概要から確認していくことしよう。

兵庫県南あわじ市⁵⁾は、南部と西部がそれぞれ紀伊水道、播磨灘に面している。一方で北部は先山山地、南東部は諭鶴羽山地、西は南辺寺山地に囲まれていて、中央部には三原平野が広がっている。自治体としては、2005年に三原町、緑町、西淡町、南淡町の4町が合併して誕生した人口4万人の地域であり、面積は229km²となっている。淡路島は電車が通っておらず、主な交通手段は自動車やバスとなる。

そのなかで福良地区⁶⁾は、南あわじ市の西南に位置する。1955年に南淡町、福良町、沼島村が南淡町に統合されている。福良地区の自然環境については、南に瀬戸内海、東西を山々に囲まれている。昔から漁業が盛んであり、特産品としては「3年とらふぐ」や鰐、温暖な気候を活かしたそうめんが有名である。また、近年では観光業にも力が注がれていることも、本稿との関連では大事となる。福良湾から渦潮観光ができるクルーズ船「うずしおクルーズ」の発着地や500年の歴史があり、国指定重要無形文化財淡路人形の上映を見ることができる淡路人形座などがある。



図 3-1 南あわじ市福良地区の位置
(出所) 地理院地図に筆者加筆



図 3-2 南あわじ市福良地区の範囲

(出所) 国土地理院

3.2. 南あわじ市の「プロモーション」

伊藤・紫牟田監修（2008；2015）による「シビックプライド」を参考にしているであろう手法を視ていくにあたり、本稿ではウェブサイト、映像として発信されている「プロモーション」⁷⁾を、南あわじ市のホームページから捉えたい。食（職）づくりのために観光・交流やブランドの確立、人づくりのための伝統文化の発信など、南あわじ市は「プロモーション」に力が注がれている⁸⁾。

そのうち、福良地区にかかる部分についてみておこう。南あわじ市の「プロモーション」から観えてきた福良像については、年間 50 万人ほどの観光客が来街することから観光地区として捉えられている。ホームページに記載されてあるお祭りや施設は、観光客を対象としたものが多数を占める。南あわじ市のホームページには、地区の様子、地元の生業や暮らし、人々の見解に立脚したものが少ない。南あわじ市の「総合戦略」において地域への郷土愛を育むために歴史学習や伝統文化の継承、芸術やスポーツ活動の推進など地域愛を育むまちづくりが目指されている⁹⁾にもかかわらず、住民がベースとなっていない「プロモーション」に終始してしまっていることは、見直されなければならないポイントとなりうる。



①ちりめんロード



②交通機関



③人形浄瑠璃座



④道の駅

図 3-3 南あわじ市の「プロモーション」活動にみる福良地区の情報発信スポット（風景）

(出所) 筆者撮影



図 3-4 南あわじ市の「プロモーション」活動にみる福良地区の情報発信スポット（地図）

(出所) 地理院地図に筆者加筆

それらのスポットの様子とその地点を地図上に落とし込んでみたものが、図 3-3 と図 3-4 となる。次章で示すこととなる、地元の方々がアイデンティティを抱くスポットとの違いを認識するうえで、この地図は大事な内容となってくる。

4. 調査結果

第 3 章での南あわじ市との比較を行うために、本章では、福良地区における参与観察と聞き取り調査の結果を示してみたい。

参与観察は、兵庫県立大学で実施してきた「コミュニティプランナー教育プログラム」での講義時に、筆者（平野）がまち歩きを通して観察し、自ら記録したものとなっている。参与観察は、2016 年 6 月 11 日～12 日、2017 年 3 月 21 日、4 月 5 日、5 月 12 日、6 月 8 日、6 月 30 日のものである。また、聞き取り調査は 2017 年 12 月 1 日、2018 年 1 月 26 日に対象者の同意を得た上で行った。以下の記述は、これらの結果に基づいている。

なお、南あわじ市福良地区の選定理由は、参与観察の記録も踏まえながら、1) 地元においても福良“地区”と場所的スケールが認識されていたこと、2) 「プロモーション」がなされているイメージとアイデンティティの乖離を実感する機会が多くあり、詳しく聞き取り調査を行う価値があると判断したことである。「シビックプライド」のアイデンティティ概念を地理学的再検討するにあたり最適と考え、選定した。

4.1. 福良地区の住民が考える地元のイメージ

まずは、フィールドワークの結果としてみえてきた福良地区の現状と、同地区の住民が考える地元のイメージを抽出してみたい。

歩くとすぐに視界に飛び込んでくるのだが、福良地区の南側には港がある。この港には、漁船も

停泊しているが、渦潮観光のための遊覧船「うずしおクルーズ」が目立つ存在となってくる。先述したが、福良地区が観光地区と視られている要因の一つと捉えられる。

一方、福良地区の中心を流れる川を挟んで東側に行くと商店街がいくつか存在する。ただ、観察の限り、シャッターのしまっている店舗も比較的多くある。そのような現状から商店街側としては、渦潮観光に来街する人たちに商店街へ来てもらいたいとの意識が強くもたれている。

人口に関しては近年、南海トラフ地震による津波の心配から、地区の南側では定住人口が減少しつつあるという。一方の北側は、山々に囲まれており、新興住宅地が生成されつつあり、定住人口が増えてきている¹⁰⁾。その影響からか、海側には昔から住んでいる高齢世帯が多く、山側は子育て世帯や新しく移住してきた人が住む傾向がみられる¹¹⁾。東側は多くの漁師が生業を築いて暮らしている古くからの漁師町であり、漁師町特有の言葉遣いがあることにも特徴がある¹²⁾。

参与観察の結果の限りだが、その際に登場する福良地区の誇りとなる風景や事物は、主に地区の東側に位置している⑤から⑧の寺社、商店街、漁港、神社が挙げられていた。南あわじ市の「プロモーション」で確認されるような、鳴門の渦潮や渦潮観光のための「うずしおクルーズ」、さらにはクルーズ船の発着地点にある足湯場、道の駅およびその周辺など地区の西側にあまり意識が向いていなかつたことが明らかになった。これらの諸点は、本稿が関心をもつ、イメージとアイデンティティの乖離を現わしうる重要なポイントとなってくると考えられる。



⑤寺院



⑥商店街



⑦港



⑧神社

図 4-1 福良地区の住民が挙げることの多い福良地区のスポット（風景）

(出所) 筆者撮影



図 4-2 福良地区の住民が挙げることの多い福良地区のスポット（地図）
(出所) 地理院地図に筆者加筆

4.2 福良地区のアイデンティティ

こうした参与観察の結果を踏まえて、福良地区の住民が抱くアイデンティティを探究するための聞き取り調査をインタビュー形式で実施した。1) 福良地区で生活する住民であること、2) 参与観察時に把握した福良地区が表象される職業の従事者および地元のキーパーソンを、地元のアドバイスを受けながら選定した。具体的には、漁師 A 氏、住職 B 氏、自営業〔素麺〕 C 氏、「うずしおクルーズ」従業員 D 氏、元自治会長 E 氏である。

4.2.1. 福良地区の魅力

本項では、福良地区におけるアイデンティティの要素を探るため住民の福良地区に対するイメージを調査するとともに、住民が想う福良の魅力についてまとめていく。その結果を示したもののが表 4-1 である。

詳しく確認しておくと、たとえば B 氏は、「福良の魅力というのは、自然的魅力だとか風光明美

表 4-1 福良の魅力

	福良の魅力
漁師A	・漁師町としての観光地
住職B	・自然的魅力、風光明美 ・人間的な魅力
自営業C	・おいしいものがある
うずしおクルーズ従業員D	・人と人との距離が近い
元自治会長E	・気候 ・人間味がある

(出所) 聞き取り調査をもとに筆者作成

だとか景観的な魅力だけでなく、福良には人間的な魅力もある」という。自然的魅力もあるが、むしろ福良地区の人柄に魅力を感じていると理解される。また D 氏からは、「福良地区の魅力は隣家同士が近いので、自分がしっかりと近所の人と向き合えば近隣住民と仲良くなれるし、子供たちの成長も一緒になって見守ってくれるところ」との見解が挙げられていた。人と人との距離が近いところに魅力を感じていると捉えられる。

4.2.2. 次世代に残していきたいモノ、コト

次に、福良地区における、アイデンティティを構成する要素における重要度合い、および今後残していきたいモノ、コトについてである。まとめたものが、表 4-2 である。

表 4-2 次世代に残していきたいモノ、コト

	残していきたいモノ、コト
漁師A	・漁師さん
	・煙島
	・お祭り
住職B	・景色
	・文化的ならわし
	・縦横のつながり
自営業C	・風景、景色
	・お祭り
うずしおクルーズ従業員D	・お祭り
	・漁業関係の
	・仕事
元自治会長E	・気候
	・人間味がある

(出所) インタビュー結果をもとに筆者作成

たとえば C 氏によると、「祭りごと、祭りをするのにも海からまちをみたときの景色、トータルの景色（まち全体の景観）が大事なので、祭りとその景色とがあってこそ福良のお祭りだ」と祭事および祭事のときの福良地区の景色を残していくモノ、コトとして挙げた。E 氏からも同様の見解が示された。「お祭りですかね、無くなつたお祭りをすべてではなくともいくつか復活でけたらいいなと思う」との意見は、福良の誇りと愛着によるところが大きい意見であろう。

4.2.3. 象徴的なモノ、コト

続いて、福良地区に対する住民からみたイメージについてである。福良地区の象徴的なモノやコトへの見解をまとめたものが表 4-3 である。

表 4-3 福良の象徴的なモノ、コト

	象徴的なモノ、コト
漁師A	・人と人のつながり
	・お祭り
住職B	・昔は流通の支点
自営業C	・福良の言葉
	・湾の中の小さな島
うずしおクルーズ従業員D	・風土や風習
	・福良に住んでいるという誇り
元自治会長E	・今は無い
	・昔は活気あるお祭り

(出所) インタビュー結果をもとに筆者作成

まず A 氏からは、「昔から良い（人と人との）つながりが特徴的であり、40 歳のお祭りや春祭りなども福良の象徴的なものとして挙げられる」と福良地区の象徴的な状況が紹介された。特に祭事において、年齢ごとにお祭りがあることは特徴的ではなかろうか。一方で B 氏からは、南あわじ市や域外の主体との意識の差異に関して重要な見解が示された。すなわち、「都会の人から見れば観光のイメージが強く、渦潮をみる観光船の発着地や「3 年トラフグ」といった福良の観光的なイメージを南あわじ市は売り出していると思うが、昔は漁業と商業、運搬といったものが（都会の人たちの）イメージであった」との意見である。B 氏の見方からは、住民を含め地区外（都会の人）からのイメージが変容していること、なかでも観光のイメージが強くなっていることへの実感が示されている。

4.2.4. 福良地区の存在

最後に、住民にとって福良地区とはどのような存在なのかまとめたものが表 4-4 である。

表 4-4 福良はどのような存在か

	福良はどのような存在か
漁師A	・一番好きなまち
	・漁師が多いまち
住職B	・自分の存在そのもの
	・心の拠り所
自営業C	・口は悪いが 気さくでいい人ばかり
うずしおクルーズ従業員D	・家族や仲間が 多くいる場所
元自治会長E	・生きがいそのもの
	・居場所、リラックスできる場所

(出所) インタビュー結果をもとに筆者作成

まず、B 氏によると、「自分が生まれ育った土地なので、自分の存在理由を福良に感じる。福良のヒトとかモノとか文化とか伝統などが私自身を形成していると思う。だから福良（伝統、文化、人々など）を大事にしていきたいなという気持ち」があるとのことであった。福良地区に対して強い愛着を抱いていることが理解される。また E 氏は、「わたしの生きがいそのもの、ふるさと、生まれ育ったとこ、リラックスできるところ」といい、福良を心の拠り所にするほど大切な存在との認識が示されていた。

5. 考察

以上を踏まえて本章では、考察を加えてみよう。

前章のインタビュー結果からは、昔からあるお祭り、人柄、言葉遣い、日々の景色や風景への誇りや愛着がキーワードとして挙げられていた。具体的には、人間味ある人びとの存在、住民同士の距離感の近さ、福良地区の風景や伝統あるお祭りの重要性の高さ、地元と域外の主体が連想する福良へのイメージの乖離と変容、福良地区への愛着や生きがいなどが自身の生活や暮らしにプラスに働いている意識が示された。

これらから理解されることは、南あわじ市の「プロモーション」の一環として発信されているホームページ上での福良像とは異なるものが多いという点にある。もちろん、渦潮、人形浄瑠璃、特産品（素麺）、食材（魚や野菜）、イベント（花火大会や女みこし）なども福良地区の大重要な要素であることに変わりはない。ただ、本稿の研究結果として示された乖離の問題は重要なものとして捉えておく必要がある。その乖離の状況を表でまとめたものが、表 5-1 となる。

表 5-1 住民と行政の意識比較表

	住民の アイデンティティ	行政の プロモーション
うずしお	△	◎
人形浄瑠璃	▲	○
大鳴門橋	▲	○
魚	◎	◎
農	○	◎
地場産業（素麺）	○	◎
（新しくできた）イベント	△	◎
昔ながらのお祭り	◎	▲
寺院や神社	◎	▲
福良湾の中の島々	○	▲

◎高い ○やや高い △やや低い ▲低い

(出所) 南あわじ市ホームページ、インタビュー結果をもとに筆者作成

まず、表 5-1 の表現を説明しておきたい。参与観察と聞き取り調査の結果、南あわじ市ホームページをもとにキーワードとして挙げられた言葉や映像などの多少がベースとなっている。そして、多いほど優先レベルが高く、少ないものは優先レベルが低いと評価し、それぞれを◎、○、▲で示してある。

その結果、アイデンティティの一致が見受けられたのは魚に関わる分野に止まっていた。他方で、南あわじ市の「プロモーション」において優先レベルが高い、渦潮、鳴門大橋、人形浄瑠璃、新しいイベントは、一致が見られなかった。すなわち、これらについては明らかに、観光客を対象とした発信と理解される。福良地区への域外からのイメージが生成されることになるのだが、調査結果でも示されていたように、域外からのイメージと地元で培われてきた福良地区のアイデンティティには乖離が生じているという事実がポイントとなってくる。すなわち、住民の意識が強かった昔ながらのお祭り、人情、寺社、福良湾の中の島々などの風景こそが住民の生活に根付いたアイデンティティとなっているのである。こうした深層レベルにおける福良のアイデンティティを勘案したうえでのプロモーションが展開されているのか、見つめ直してみることが求められていよう。

6. おわりに

最後に、本稿の考察から明らかになったことを 2 点まとめたうえで、本稿なりの結論を示しておきたい。

第一に、場所的アイデンティティとは、深層性を有しているという点である。地理に関わるアイデンティティは、個々人の経験に基づく場所に根付いたモノやコトであることが調査結果からも明らかとなっている。そのうえで大事になるのは、この深層レベルのアイデンティティへの感覚が、個々人によって異なる面がある一方で、ある程度、場所性との関連から共有されているものもあるということに特徴があろう。福良地区で示された住民のアイデンティティは、第 4 章と第 5 章で示されたように強弱がある一方、共通認識の部分でも深層レベルのアイデンティティが存在していることが理解された。すなわち、「シビックプライド」のアイデンティティ概念が地理的事象とかかわってくる限り、場所に根ざした深層レベルの議論が求められるといえる。その議論が進められていくためにも、場所的アイデンティティと深く関わる住民たちが抱くプライドを把握したうえでの表象は必要なものとなる。

第二に、福良地区をめぐる行政と住民の意識との乖離である。特に、住民がアイデンティティと

抱いている福良地区の魅力が、行政の「プロモーション」の内容に加味されていない点が明らかになった。これは概念的論点として示した通り、マス・メディアとミックスされたことでイメージが表層的なものに止まりアイデンティティが大衆化されてしまうというレルフ（1999）の見解が一定程度、証明されたといってよかろう。こうしたイメージとアイデンティティとの乖離を少しでも防いでいくためには、「丹念にフィールドを歩き、実際に暮らす人たちの言葉を紡ぎ出す方法論」が求められる。域外への情報発信やプロモーションそのものが悪いと言うつもりはないが、少しでもイメージとアイデンティティとの乖離を無くすための努力が、政策立案者および制作者に希求される。

以上のことから、既存の「シビックプライド」研究の課題と、その課題を補完しうる重要な論点の一端は洗い出せたのではなかろうか。すなわち、「シビックプライド」において地理的事象としてのアイデンティティを取り扱う限りは、場所的アイデンティティの実態を捉えることが不可欠になると結論づけられる。このプロセスが欠落してしまうと、地理をめぐるイメージとアイデンティティとの間での乖離が生じてしまう。ひいては、発想自体はそれほど悪くない「シビックプライド」という考え方の芽を摘むことにもなりかねない。場所的アイデンティティとの乖離が生じたまま、「シビックプライド」の名のもとイメージアップや来街者数のためだけに「プロモーション」がなされてしまってよいものかどうか。シビックたる主体には、埋没した自らの「プライド」を省察するための“コミュニケーション”が必要であろう。こうした省察を促すための方策を講じることが、筆者たちの今後の課題である。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

注

- 1) 南あわじ市（2017）『南あわじ市まち・ひと・しごと創生総合戦略〔平成29年度改正版〕』
(<http://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/uploaded/attachment/300836.pdf>) 最終閲覧日：2019年1月16日。
- 2) 伊藤たちは、「都市と市民の接点」（伊藤・紫牟田監修 2008）とも表現する。これらの諸点が「シビックプライド」という考え方の指標になっている。
- 3) たとえば、一部の自治体の「シティプロモーション」が想定される。先ほど触れた通り、「シビックプライド」も「シティプロモーシ

ョン」のキーワードになりつつある（小島・片田江 2015,p.212）。一例だが「シティプロモーション」とは、①地域イメージの向上（地域ブランドの推進）、②交流人口の増加（観光客等の来訪者増加）、③定住人口の増加（地域の愛着度向上、転入者の増加）などを政策目標とした「都市・地域の売り込み」と捉えられている（牧瀬 2018）。本稿が懸念するのは、「シビックプライド」という新たな考え方において提示されている一つ一つの概念が丁寧に精査されなければ、住民不在の「売り込み」のための「プロモーション」に動員される可能性にある。他方で、住民とともに地元に向かたシビックプライドを喚起しうるプロモーションを目指す自治体もなかには存在する。兵庫県内での先進的事例を示しておくなれば、筆者たちが把握する限り、西脇市などはその代表といえるかもしれない。

- 4) アメリカのコミュニケーション学者メイロウイッツ（2003）やイギリスの教育学者マスター・マン（2010）などが挙げられる。
- 5) 南あわじ市ホームページ（2018）『地区別・行政別人口世帯数』
(<https://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/so-shiki/shimin/jinkou.html>) 最終閲覧日：2019年1月16日。
- 6) 南あわじ市ホームページ
(<https://www.city.minamiawaji.hyogo.jp/>) 最終閲覧日：2019年1月16日。
- 7) 前掲注3)。
- 8) 前掲注1)。
- 9) 前掲注1)。
- 10) 南あわじ市福良乙の人口は2,386人である。出所は前掲注5)より算出。
- 11) 南あわじ市福良乙の世帯数は1,166世帯である。出所は前掲注5)より算出。
- 12) たとえば、福良の言葉において「へびー」は「頑張れ」を意味し、「そら」は「路地裏」を意味する。また語尾が「～しとら」となるなど。

参考文献

- ・伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編（2008）『シビックプライド－都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議。
- ・伊藤香織（2008）「シビックプライドとは何か」伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編（2008）『シビックプライド－都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議: pp.164-171。

- ・伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編 (2015)『シビックプライド2—都市と市民のかかわり方をデザインする』宣伝会議。
- ・伊藤香織 (2015)「私たちの生きる都市とシビックプライド」伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編 (2015)『シビックプライド2—都市と市民のかかわり方をデザインする』宣伝会議: pp.176-179。
- ・石見利勝・田中美子 (1992)『地域のイメージとまちづくり』技報堂出版。
- ・大堀研 (2010)「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討」『社會科學研究 61-5,6』: pp.143-158。
- ・小島桃子・片田江由佳 (2015)「シビックプライド研究会活動記録」伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編 (2015)『シビックプライド2—都市と市民のかかわり方をデザインする』宣伝会議: pp.208-215。
- ・紫牟田伸子 (2008)「デリバリーのためのデザイン」伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編 (2008)『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議: pp.172-179。
- ・紫牟田伸子 (2015)「おわりに」伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編 (2015)『シビックプライド2—都市と市民のかかわり方をデザインする』宣伝会議: pp.216-217。
- ・杉山武志 (2011)「集団学習におけるリテラシーの実践と地域アイデンティティの徹底化—大阪市生野・東成区異業種交流会『フォーラム・アイ』を事例に」『経済地理学年報 57-2』: pp.1-21。
- ・牧瀬穂編 (2018)『地域ブランドとシティプロモーション』東京法令出版。
- ・マスターマン,L.著,宮崎寿子訳 (2010)『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社。
- ・メイロウイッツ,J.著,安川一・高山啓子・上谷香陽訳 (2003)『場所感の喪失—電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新陽社
- ・レルフ,E.著,高野岳彦・石山美也子・阿部隆訳 (1999)『場所の現象学—没場所性を越えて』筑摩書房。

独居中高齢女性における食品摂取多様性の実態

松岡里奈，内田勇人
(健康教育学研究室)

1.はじめに

一般的に、高齢者は口腔や摂食・嚥下の問題、発熱、病気、身近な人のライフイベントによる食欲の低下、あるいは買い物や食事づくりの困難さから、習慣的な食事量が低下し、低栄養状態に陥りやすくなる¹⁾。栄養状態に何らかの問題を有する高齢者は約40%にのぼるが、そのうちの約半数は低栄養状態にあることが指摘されている²⁾。なかでも、独居高齢者は非独居高齢者と比べて、食物摂取状況に問題がある場合が多い。独居高齢者は疾患や障害のリスクが高い等の問題点も明らかになっており、低栄養状態の改善は喫緊の課題となっている³⁾。

一方、地域高齢者においては食品摂取の多様性の高さが高次生活機能の低下や低栄養状態の予防に貢献することが知られており、種々の食品をバランスよく摂取することが重要になる⁴⁾。先行研究をみると、虚弱状態にある高齢者においては多様な食品を摂取することと良好な生活機能、生活の質、身体機能は高く関連しており、虚弱高齢者が在宅で自立した生活を継続するためには多様な食品の摂取が大切になる¹⁾。高齢者が健康を保持増進し、介護状態に陥ることなく可能な限り自立した生活を送っていくためにも、低栄養状態を予防・改善することが強く求められている⁵⁾。

ところで、高齢者の低栄養状態を改善するためには、栄養状態の把握が必要になる。しかしながら、施設高齢者における摂食状況については研究知見が集積されつつあるものの、地域高齢者においては調査研究が少なく、食品摂取の多様性の現状は必ずしも十分に明らかになっていない⁶⁾。要介護状態にある虚弱高齢者を対象とした研究は多くみられるが、地域自立高齢者における研究は少なく、自立高齢者の低栄養状態の評価についての報告も限られている^{2,7)}。

そこで本研究は、地域に在住する中高齢者の食品摂取の多様性の状態について明らかにすることを目的として実施した。特に独居者と非独居者の間の相違に焦点をあて、両群の間で食品摂取の多様性の状況に差がみられるかどうかについて検討した。

2.方法

研究参加者として、兵庫県A市に在住する中

高齢女性201名を選択した。研究参加者は、A市で開発されたご当地体操の実践者であり、自主体操グループの集会への参加者であった。調査期間は2018年5月から6月であった。調査項目として、地区名、年齢、同居者・配偶者の有無、食品摂取状況等を選択し、自記式アンケート調査法により評価した。

食品摂取状況は、熊谷ら⁵⁾が開発した「食品摂取の多様性評価票」を用いて把握した。魚介類・肉類・卵・牛乳・大豆製品・緑黄色野菜・海藻類・いも類・果物類・油脂類の10食品群について、「ほとんど毎日食べる」、「2日に1回食べる」、「週に1~2回食べる」、「ほとんど食べない」の4件法で回答を求めた。「ほとんど毎日食べる」を1点、それ以外の回答を0点として点数を合計し(10点満点)、食品摂取の多様性得点を算出した。なお、目標点数が7点以上とされているため、本研究では合計点数6点以下を「多様性低得点群」、7点以上を「多様性高得点群」と分類した。

分析方法として、独居者の特徴を明らかにすることを目的として研究参加者を独居者群と非独居者群の2群に分け、両群間で各種調査項目値を比較検討した。統計学的方法は、量的変数の比較には対応なしのt検定、2群間の頻度の差の検定は χ^2 検定を選択した。分析にはIBM SPSS statistics24を使用し、有意水準は5%未満をもって有意差ありとした。

倫理的配慮として、世界医師会のヘルシンキ宣言に則り、調査実施前に研究参加者へ調査目的及び内容について説明を行った。研究参加者には、回答内容は厳重な管理のもと回答者のプライバシーは保護されること、回答の途中であっても回答をやめることができること、アンケートは無記名式とし回答内容は外部に漏洩されないこと、回答をもって本調査に同意したと判断することを伝えた。これら手順のもと、調査が実施された。

3.結果

1. 研究参加者における各調査項目値の概要

研究参加者における各調査項目値の概要は表1に示すとくであった。研究参加者201人の平均年齢と標準偏差は77.0±5.8歳(範囲56~90歳)であった。同居者がいない者(独居者)

は71人(35.3%)、同居者がいる者(非独居者)は129人(64.2%)であった。食品摂取の多様性については、食品摂取多様性得点が6点以下の「多様性低得点群」が148人(73.6%)、7点以上の「多様性高得点群」が45人(22.4%)であった。7割以上の者が多様性低得点群であった。食品群別の摂取頻度をみると、ほとんど毎日摂取している食品で最も多かったのは「牛乳」(83.6%)であり、次いで「緑黄色野菜」(73.6%)、「大豆・大豆製品」(57.2%)、「果物類」(55.2%)であった。ほとんど毎日摂取している食品で最も少なかったのは「いも類」(15.4%)であり、次いで「肉類」(33.3%)、「魚介類」、「海藻類」が同数(各33.8%)であった。

2. 独居者群と非独居者群の間における各種調査項目値の比較

独居者群と非独居者群の間で各種調査項目値を比較した結果は表2に示すごとくであった。両群間に食品摂取多様性の総得点では有意差はみられなかつたが、食品群別でみると「魚介類」($p=0.045$)、「肉類」($p=0.017$)、「海藻類」($p=0.039$)、「油脂類」($p=0.001$)において有意差がみられ、4項目全ての食品群において非独居者群よりも独居者群の方が「ほとんど毎日摂取している者」の割合は低かった。

4. 考察

本研究は、地域に在住する中高齢者の今日における食品摂取の多様性の状況について検討した。本研究参加者の食品摂取多様性得点の平均は4.89点であり、7割以上の者が食品摂取多様性得点は6点以下であった。岡辺ら⁸⁾は平均年齢71.76歳の地域在住高齢者の栄養改善に関する介入調査において、開始時の食品摂取多様性得点の平均点は4.1点であったと報告しており、本研究参加者の平均点も近似していた。その一方で、熊谷ら⁵⁾は平均年齢71.5歳の地域高齢者の調査において、食品摂取多様性得点の平均点は6.7点、6点以下の者は44.6%と報告しており、本研究参加者の値はこれらと比較するといずれも高いことが示唆された。調査実施時期は岡辺らが2013年、熊谷らは1992年であることから、食品摂取多様性得点の相違は調査実施時期にみられる年代差、時代差が影響しているとも考えられる。しかしながら、本研究参加者は調査実施時期が近い岡辺らの研究参加者より平均年齢は5.24歳高かった。高年齢者のほうが食品摂取多様性得点は高い傾向にあることから、栄養状態はより一層低いことが示唆された。

表1. 研究参加者における各調査項目値の概要

調査項目	区分	人数(%)
年齢	55-69歳	18(9)
	70-74歳	50(24.9)
	75-79歳	69(34.3)
	80-84歳	44(21.9)
	85-90歳	20(10)
	平均値±SD	77.0±5.8
同居人数	1人(独居)	71(35.3)
	2人	69(34.3)
	3人	30(14.9)
	4人	13(6.5)
	5人	6(3)
	6人	7(3.5)
	7人	4(2)
配偶者の有無	あり	94(46.8)
	なし	104(51.7)
食品摂取の多様性得点	多様性低得点群(6点以下)	148(73.6)
	多様性高得点群(7点以上)	45(22.4)
	平均値±SD	4.9±2.2
魚介類	ほとんど毎日	68(33.8)
	2日に1回	83(41.3)
	1週間に1~2回	49(24.4)
	ほとんど食べない	0(0)
肉類	ほとんど毎日	67(33.3)
	2日に1回	79(39.3)
	1週間に1~2回	51(25.4)
	ほとんど食べない	3(1.5)
卵	ほとんど毎日	99(49.3)
	2日に1回	64(31.8)
	1週間に1~2回	34(16.9)
	ほとんど食べない	4(2)
牛乳	ほとんど毎日	168(83.6)
	2日に1回	13(6.5)
	1週間に1~2回	11(5.5)
	ほとんど食べない	8(4)
大豆・大豆製品	ほとんど毎日	115(57.2)
	2日に1回	62(30.8)
	1週間に1~2回	20(10)
	ほとんど食べない	3(1.5)
緑黄色野菜	ほとんど毎日	148(73.6)
	2日に1回	44(21.9)
	1週間に1~2回	8(4)
	ほとんど食べない	1(0.5)
海藻類	ほとんど毎日	68(33.8)
	2日に1回	68(33.8)
	1週間に1~2回	52(25.9)
	ほとんど食べない	12(6)
いも類	ほとんど毎日	31(15.4)
	2日に1回	62(30.8)
	1週間に1~2回	98(48.8)
	ほとんど食べない	10(5)
果物類	ほとんど毎日	111(55.2)
	2日に1回	54(26.9)
	1週間に1~2回	28(13.9)
	ほとんど食べない	6(3)
油脂類	ほとんど毎日	107(53.2)
	2日に1回	51(25.4)
	1週間に1~2回	36(17.9)
	ほとんど食べない	5(2.5)

食品摂取多様性得点を食品群別にみると、いも類(15.4%)と肉類(33.3%)の摂取頻度が低かった。先行研究においても、高齢者はいも類と肉類の摂取頻度は低く、同様の結果が得られた。いも類の不足は食物纖維量の低下をまねき便秘の原因となることや、肉類の摂取量の不足は良質のタンパク質の不足となり、筋力の低下や要介護化に影響することが報告されている⁹⁾。本研究において、各食品の摂取・非摂取の

理由については確認をしていないが、中高齢女性の場合、血中コレステロールや中性脂肪、肥満に対する関心の高さから、肉類の摂取を自ら過度に控えていた可能性もある。しかし、肉類の摂取量の低下は低栄養状態をまねくだけでなく、タンパク質の不足により骨格筋の維持が困難になることが危惧される。骨格筋を良好な状態に保つことは高齢期の虚弱、衰弱を防ぐ上で重要であり、高齢者の生活の質の保持増進には肉類の摂取は重要になることが指摘されている⁵⁾。高齢期においては、肉類は過少摂取の方が健康には負の影響を及ぼすことが明らかになっていることから、これらの食品を意識的に摂るように働きかけていく必要があると考える。

独居者群と非独居者群の間で食品摂取多様性得点を比較したところ、非独居者群より独居者群の方が魚介類、肉類、海藻類、油脂類の摂取頻度が有意に低かった。酒元ら¹⁰⁾は施設や病院だけではなく、在宅独居高齢者にも低栄養が疑われる者は存在することを指摘しているが、本研究においても同様の結果が得られた。さらに北野ら¹¹⁾は独居者の方が魚介類、肉類、油脂類の摂取頻度は低く、世帯状況が食品摂取や食生活の満足度に影響を与え、一人暮らし高齢者では栄養摂取の低下がみられることを報告している。本研究でも同種の食品の摂取頻度は低く、共通していた。独居の中高齢者においては、これら食品群の摂取頻度が低下する可能性が高く、より一層注意が必要になることが指摘できる。本研究では、海藻類の摂取頻度も独居者において低く、適切な情報提供と栄養指導が必要になると思われる。

本研究により、低栄養状態の可能性が高い地域在住の中高齢者は多く存在し、特に独居高齢者においてその傾向は顕著であることが示唆された。本研究において低栄養の状態にある者が多く見られた原因の一つとして、調査地域における食材入手の困難さが影響している可能性が指摘できる。今回調査を行った

地域周辺では、徒歩圏内にスーパー等の食料品を購入できる場所は少ないことが推察される。A市の小売商店数は昭和57年の740店をピークに平成11年には528店にまで減少している。また、約25%の人が公共交通の全くない公共交通空白地に居住していることが、A市の公表データから推定される。電車やバス等の公共交通機関が少ないため移動手段は限られており、これらが食品摂取の多様性の低さに影響を及ぼしているとも考えられる。新開¹²⁾は、高齢者の低栄養を防ぐ方策として、買い物の利便性の向上、宅配、民間事業による配食・宅配サービスの普及等、地域ぐるみで高齢者の食環境を向上させる必要性を指摘している。本調査地域においても環境整備は重要な課題であると考える。

肥満に対するテレビ等のメディアの影響も考えられる。過度の肥満には気をつける必要があるが、メディアで得た情報をそのまま取り入れ、その結果、過度に食物摂取を控えること等に繋がっている可能性が考えられる。正しい情報のもとで食生活を改善することが重要であり、その意味において低栄養を予防するための食事改善の講習会や料理教室等の栄養改善支援事業を実施していく必要があると思われる。高齢者の

「栄養改善」は、介護予防事業においても重要な柱の一つである。全国的には栄養改善プログラム等が実施されている地域もあるが、他事業

表2. 独居者群と非独居者群の間における各種調査項目値の比較

調査項目	人数	区分	合計	独居者群	非独居者群	χ^2 値	p値
年齢 n=200		前期高齢者 後期高齢者	68(34) 132(66)	19(26.8) 52(73.2)	49(38) 80(62)	2.571	0.109
配偶者の有無 n=198		あり なし	94(47.5) 104(52.5)	1(1.4) 68(98.6)	93(72.1) 36(27.9)	89.968	0.001**
食品摂取多様性得点 n=193		多様性低得点 多様性高得点	148(76.7) 45(23.3)	53(81.5) 12(18.5)	95(74.2) 33(25.8)	1.292	0.256
魚介類 n=198		0点 1点	131(66.2) 67(33.8)	52(75.4) 17(24.6)	79(61.2) 50(38.8)	4.005	0.045*
肉類 n=199		0点 1点	132(66.3) 67(33.7)	54(77.1) 16(22.9)	78(60.5) 51(39.5)	5.652	0.017*
卵 n=200		0点 1点	101(50.5) 99(49.5)	35(49.3) 36(50.7)	66(51.2) 63(48.8)	0.064	0.800
牛乳 n=200		0点 1点	32(16) 168(84)	9(12.7) 62(87.3)	23(17.8) 106(82.2)	0.905	0.341
大豆・大豆製品 n=199		0点 1点	85(42.7) 114(57.3)	32(45.7) 38(54.3)	53(41.1) 76(58.9)	0.397	0.528
緑黄色野菜 n=200		0点 1点	53(26.5) 147(73.5)	21(29.6) 50(70.4)	32(24.8) 97(75.2)	0.535	0.464
海藻類 n=199		0点 1点	132(66.3) 67(33.7)	53(75.7) 17(24.3)	79(61.2) 50(38.8)	4.257	0.039*
いも類 n=200		0点 1点	170(85) 30(15)	61(85.9) 10(14.1)	109(84.5) 20(15.5)	0.072	0.788
果物類 n=198		0点 1点	88(44.4) 110(55.6)	33(47.1) 37(52.9)	55(43) 73(57)	0.319	0.572
油脂類 n=198		0点 1点	91(46) 107(54)	44(63.8) 25(36.2)	47(36.4) 82(63.6)	13.523	0.001**

人数(%)

χ^2 検定を用いた。*:p<0.05 **:p<0.01

と比較すると実施率は低迷しており、その原因として栄養改善に対する認知度の低さがあげられている¹⁾。広報活動等にも力を入れて認知度を上げ、実施率を向上させていく必要があると考える。

高齢になると咀嚼能力の低下や消化・吸収率の低下、運動量の低下に伴う摂取量の低下などが顕著になり、特に個人差は大きくなることが指摘されている¹³⁾。一人一人の食生活の状況や身体の状態を十分に把握し、その人に合った個別栄養指導といった視点も重要になると考えられる。

5. 結論

本研究は、A市在住の中高齢女性201名を対象として、地域中高齢者における食品摂取の多様性の状態について明らかにすることを目的とした。自記式アンケート調査を行い、独居者と非独居者の間の2群間で各種調査項目値を比較検討し結果、以下の知見が得られた。

1. 本研究参加者の7割以上の者が低栄養状態にある可能性が示唆された。
2. 食品摂取多様性得点を食品群別にみたところ、非独居者群より独居者群の方が「魚介類(p=0.045)」、「肉類(p=0.017)」、「海藻類(p=0.039)」、「油脂類(p=0.001)」の摂取頻度有意に低かった。

本研究により、低栄養状態の可能性が高い地域在住の中高齢者は多く存在し、特に独居高齢者においてその傾向は顕著であることが示唆された。中高齢者に対して、多様な食品を意識的に摂るよう働きかけていくことが重要であり、その方策として買い物の利便性の向上、宅配・配食サービスの普及、食事改善の講習会や栄養改善プログラム、個別栄養指導、料理教室等の援事業が重要になることが指摘できる。

謝辞

本研究の実施にあたり、アンケート調査にご協力いただいたA市地域住民の皆様、A市保健センター、並びに同圏域の兵庫県健康福祉事務所の皆様に深く感謝し、御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 深作貴子、奥野純子、戸村成男、清野諭、金美芝、薮下典子、大藏倫博、田中喜代次、柳久子「特定高齢者に対する運動及び栄養指導の包括的支援による介護予防効果の検証」『日本公衆衛生雑誌』、58(6), 420-432, 2011
- 2) 岡田和隆、柏崎晴彦、古名丈人、松下貴恵、山田弘子、兼平孝、更田恵理子、中澤誠多朗、村田あゆみ、井上農夫男「自立高齢者における栄養状態と口腔健康状態との関連」『老年歯学』、27(2), 61-68, 2012
- 3) 吉葉かおり、武見ゆかり、石川みどり、横山徹織、中谷友樹、村山伸子「埼玉県在住一人暮らし高齢者の食品摂取の多様性と食物アクセスとの関連」『日本公衆衛生雑誌』、62(12), 707-718, 2015
- 4) 厚生労働省「食生活指針について」.
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000128503.html> (2019年2月1日にアクセス)
- 5) 熊谷修、渡辺修一朗、柴田博、天野秀紀、藤原佳典、新開省二、吉田英世、鈴木隆雄、湯川晴美、安村誠司、芳賀博「地域在宅高齢者における食品摂取の多様性と高次生活機能低下の関連」『日本公衆衛生雑誌』、50(12), 1117-1124, 2003
- 6) 三浦宏子、原修一、森崎直子、山崎きよ子「地域高齢者における活力度指標と摂食・嚥下関連要因との関連性」『日本老年医学会雑誌』、50(1), 110-115, 2013
- 7) 新井清美、榎原久孝「都市公営住宅における高齢者の低栄養と社会的孤立状態との関連」『日本公衆衛生雑誌』、62(8), 379-389, 2015
- 8) 岡辺有紀、關明日香、三宅裕子、熊谷修「自立高齢者における食品摂取多様性向上プログラム[しっかり食べチェックシート12]と高次生活機能との関連」『日本公衆衛生雑誌』、65(7), 347-355, 2018
- 9) 飯吉令枝、井上智代「A県豪雪地域における高齢者の食品摂取多様性に関する要因」『新潟医学会雑誌』、131(10), 587-597, 2017
- 10) 酒元誠治、古家隆、堀之内恭子、興梠郁子、鈴木泉、久野(永田)一恵「配食サービスの有無別独居高齢者の栄養状態」『日本公衆衛生雑誌』、51(8), 631-640, 2004
- 11) 北野直子、江藤ひろみ、北野隆雄「熊本県一農山村に居住する高齢者の健康状態と食・生活習慣との関連について」『栄養学雑誌』、68(2), 14-22, 2010
- 12) 新開省二「高齢期の食・栄養の重要性と食環境の整備」『老年社会科学』、34(3), 420-425, 2012
- 13) 厚生労働省「日本人の食事摂取基準」.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/eiyou/syokukiji_kijyun.html (2019年2月1日にアクセス)

◆エコ・ヒューマン地域連携センターとは？

エコ・ヒューマン地域連携センター（略称：EHC）では、環境人間学部の学生・教員による地域連携活動を推進しています。地域連携活動とは、地域に関わるさまざまなアクター（住民、行政、NPO、企業、専門家など）と学生・教員が連携し、地域課題解決の新しいかたちを生みだすいとなみのことです。その活動に参加することを通して、大学における教育と研究の充実も図っています。大学の資源（知識・技術・マントパワー）をいかし、地域の課題解決や価値の創造に挑戦することで、大学と地域の相互発展をめざしています。

エコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集 2018（通巻2号）

発行 平成31年（2019年）3月31日

兵庫県立大学環境人間学部 エコ・ヒューマン地域連携センター

〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1-1-12 姫路環境人間キャンパス内

センター長：三宅 康成 副センター長：井関 崇博

兼務教員：乾 美紀、内田 勇人、太田 尚孝、杉山 武志、土川 忠浩、中桐 齊之、
安枝 英俊、山村 充（五十音順）
